日本歴史新書 増補版

五山文学

―大陸文化紹介者としての五山禅僧の活動―

玉村竹二著

著者略歴

明治44年　名古屋に生まれ，東京に成人す
昭和10年　東京帝国大学文学部国史学科卒業
現　　在　東京大学教授。史料編纂所勤務

昭和四十一年十一月十日　印刷
昭和四十一年十一月十五日　発行

日本歴史新書
五山文学
定価金四九〇円

著者　玉村竹二
東京都新宿区払方町二七

発行者　佐藤正叟
東京都板橋区板橋四丁目四七ノ七号

印刷者　山田博

発行所　至文堂
東京都新宿区払方町二七
電話東京(二六〇)二二一一番
振替口座東京一九五〇七番

株式会社三陽社印刷

はしがき

一　五山文学作家及び作品が、従来あまりに個々に羅列的にのみ理解されていたのは、遺憾なことである。よって本書は中国及び日本に於ける、禅林文学享受の階層の隆替を基準として、それらの作者作品に、一応の系列をつけることを目的とした。よって相当に思い切って筋を通した所もある。

一　この故に、中国よりの禅林文学の移植を主とし、その移植の径路に数系統の別のあることを強調し、延文・貞治年代、五山文学の内面的な最高潮の時期と、應永年代、その外形的な最盛況の時期とを、その叙述の中軸としたので、その持続衰頽期に関しては、紙面の都合上大いに簡略にした。

一　したがって、日本芸術史上、室町文化の隆昌期として併称される北山・東山両時代のうち、北山時代については応永年代と号して、説く所があったが、東山時代は、五山文学の和様化衰頽の時期に当るので、殆ど目立った叙述をしなかった。

一　本書に論ずるところは、文学を主としたために、古典攻究・講学には、殆ど触れなかった。したがって抄物（しょうもの）や足利学校等のことは、悉く割愛した。

一　各時代の詩文鑑賞評価の変遷や文学論（詩話をはじめとして）にも触れるべきであったが、その思潮に基づいて、どんな作品が生れたかを証するだけの素養が私にはないので説き及べなかった。したがって従来喧伝されていた詩禅一味論をも度外視している。これには又別の理由もある。題材を仏教的なものに限定され、しかも表現には文学的な意欲が旺盛であった元末の古林派下の人々が、その調和に苦しんで言出したことに過ぎず、実際の文学活動には、左程に影響のないものであると思うからである。

一　作家列伝中には、主要なものには、作品例を引いたが、それに漏れた人々の作品も、他の箇所で、別の目的の例証として、引用し、なるべく満遍にとったつもりである。

一　禅宗は特に法系を重んずる宗派であり、それを語る時には、常にその法系を脳裏にえがきつつ話をすすめなければならない。よって本来ならば、巻末に関係法系を附載すべきであったが、紙面の都合上、割愛を余儀なくされた。しかし本書の各部に、局部的に法系的叙述が施してあるから、丹念なる読者諸賢があって、これをつなぎ合される時は、ついには綜合的な宗派図が再現出来るようになっている。なお法門上の弟子には必ず法嗣という語を用ひて表現した。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

一　五山文学の作風又は文学素養の教化についての系統、いわば学系のようなものは、法系と一致することは稀で、おのずから別の相承をなしている。これについても綜合図表を掲げたかったが、その本意は達せられなかった。したがって法系と同様、各部に分けて敍述してあるから、その綜合については賢察を請う次第である。五山文学者の地位を判断するには、その法系・学系の両方面を併せて考察することが肝要と思う。なお法門上の弟子と区別するために、学系上の弟子には門生・門人という語を用いた。

一　現在多数の人々の理解に資するためには、漢文は翻訳されなければならないが、漢文学は、構成的要素がその半ばを占めて居り、原形を視覚によって感じとる所に、一面の美的要因があるので、これを崩してしまえば、情緒は伝えられても、象徴的な美しさは失われてしまうので、原文のまま載せた。ただその文意を理解しなければ、説明の筋が運びにくい場合には、原文の下段又は直後に「訓読」を加えた。

一　巻末には、五山文学作品表を加え、本文の敍述の不足不備を補った。その詳細については同表末の凡例を参照していただきたい。かなり網羅してある積りである。

一　私のこの方面の勉学の場所は、主として、東京大学史料編纂所・建仁寺両足院・東福寺霊雲院と石井光雄氏の積翠文庫に於てであつた。その蔵書の閲読を許された如上の諸機関の当事者の方々に、この機会に甚深の謝意を表する。

一　私がこの部門に志してから二十五年、大学に於ける辻善之助先生の御誘掖は言うに及ばず、既に故人になられた鷲尾順敬博士よりも、種々の示教を辱うした。それに何としても偲ばれるのは、この道の先輩玉鉉文鼎和尚（小畠氏）と虎月芳瑠和尚（白石氏）であり、又そもそも五山というものの特異な雰囲気を教えられたのは上村観光居士の遺著と閔州東周和尚（佐賀氏）の論稿からである。又史料の採訪にあたって、鉗鎚を下された竜宗東炎和尚（後藤氏）実堂玄実和尚（樋口氏）の両師のことなど、今執筆に当って已往の追憶に耽らざるを得ない。

一　最後に本書の原稿修正及び校正については、臼井信義・今枝愛真・乙訓健二の三氏のお世話になることが甚だ多く、図版に関しては、松下隆章氏の斡旋に負う所が大であった。感佩の至である。

昭和三十年五月十五日　　玉村竹二

目次

第一章　五山文学とは
一　五山文学とは……一
二　五山・十刹・諸山……二
三　五　山　派……一八
第二章　禪宗の日本への伝来　――五山派の起源――
一　中国禅宗史の概要……二三
二　禅宗の日本への伝来……二九
三　禅宗伝来の意義――その一　新宗教運動の一翼として……三三
四　禅宗伝来の意義――その二　外来文化摂取史上より見たる……三六
五　日本人の禅宗に対する理解の限界……四三
六　鎌倉武士の禅宗に対する態度……四六
第三章　五山文学の淵源

一　禪林文学の沿革……五一
二　禪林文學の日本への移植――五山文學の萠芽――……五六
第四章　五山文学の成長とその系譜
一　宋　朝　系……六〇
二　元　朝　系――その一　古林派……六七
三　元　朝　系――その二　大慧派……九二
第五章　五山文学の表現形式
一　五山文學の分類……一〇七
二　宗旨表現手段の部類……一〇八
三　語錄的性格の部類……一〇九
四　寺制上實用の部類……一四〇
五　純然たる在俗文學の部類……一四六
第六章　四六駢儷文
一　四六文の沿革……一四八

二　禪林四六文の構成……一五八
三　四六文作法の傳授……一六八

第七章　五山文学の興隆

一　日本禪僧の漢文學習得の態度――言語の問題――……一七三
二　諸傳統の綜合……一七八
三　應永年間の文雅の友社……一九五
四　相國寺の友社……二一四
五　建仁寺の友社……二三一
六　文學僧補遺……二三四

第八章　五山文学の変質と衰頽

一　雅・俗の對立……二三六
二　知的水準の過度の上昇……二四五
三　主智より唯心へ……二六五
四　五山文學の末路……二七五

五山文学作品表……二七九
図版
傳天章周文筆「三益齋図」東京都静嘉堂文庫蔵……卷頭
金峰明昶住東福江湖疏軸　京都市東福寺光明院蔵……一四二―三
竺仙梵僊自筆法語　福井縣高成寺蔵……一四三―三
参考文献……二九三
索引……二九八

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

第一章　五山文学とは

一　五山文学とは

五山文学という言葉は、世間ではふとある機会に小耳に挾んだ事がある、という程で、親しみ深いとも、耳新しいともいえないものであろう。それは何かと問われて、一口に答えれば、日本に行われた漢文学の一類である。日本には奈良朝時代以来、引き続いて、中国文体を以て、文学作品をものする事は行われて来たが、その中に特に目立った山が三つある。その一は奈良朝における搢紳貴族の漢文学であり、その二は江戸時代に於ける儒者文人の漢文学であり、その三が今これから述べようとする五山文学なのである。五山文学とは、室町時代に盛であった漢文学で、僧侶、もっと具体的にいえば、禅宗僧侶、その中でも五山派といわれる宗派に属する禅僧によって、創作され鑑賞された漢詩文のことを指す言葉である。それでは五山派とは何かという事になるが、それは後章で述べる事として、ともあれ、この五山文学は、江戸時代の儒流のものと比べれば勿論のこと、奈良時代の貴族のものよりも、文学的価値が高いと、人によっては口を極めて賞讃する。見る人々の立場によって、評価はまちまちになろう。しかし少くとも、江戸時代のような儒教的な道義観を帯びていないという点で、我

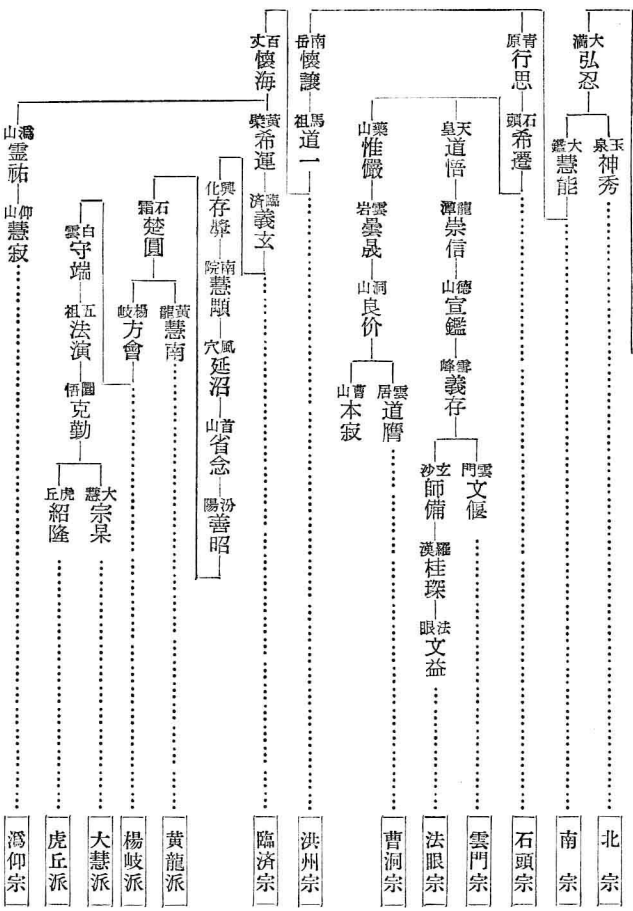
我が今日うけとっている所謂「漢文」的な色彩、――この色彩は現在非常に嫌われているものであるが――とは非常に隔りがある事だけは確かである。

さてそこで文学という事であるが、私は元来文学研究者でも文学者でも文学史家でもない。したがって文学にとっては全くの素人である。それ故に、これより後、五山文学を説くのに、その作品の作風とか、文学的価値について、責任ある論評が出来ないのは、甚だ遺憾である。ただ私は史学を専攻しているものとして、その文学を生んだ環境について、やや詳しく観察して見ようと思う。

二　五山・十刹・諸山

五山文学が、室町時代の禅宗のうち、五山派といわれる一派によって作られたといったが、それでは五山派とは何かという事になる。

五山とは、文字通り五つの山、即ち禅寺の寺格であって、時の政府の定めた寺格の最上位に列せられた五つの寺という事である。しかし物事は、そう簡単に片付かないのであって、これを十分に説明するためには、中国禅宗史の概観を試みなければならないが、それは後章に譲るとして、一概に中国は官僚的色彩が表面に強く表われる所なので、官僚的な統制が、仏教にも強く浸り込んでいる。殊に最も中国化した仏教と見られる禅宗に於てはなお更である。禅宗の教團も、中国に於て多く分派を生


菩提達磨
大祖慧可
鑑智僧璨
大醫道信
大滿弘忍
玉泉神秀
大鑑慧能
青原行思
石頭希遷
天皇道悟
龍潭崇信
德山宣鑑
雪峰義存
雲門文偃
玄沙師備
羅漢桂琛
法眼文益
藥山惟儼
雲岩曇晟
洞山良价
雲居道膺
曹山本寂
南岳懷讓
馬祖道一
百丈懷海
黃檗希運
臨濟義玄
興化存獎
南院慧顒
風穴延沼
首山省念
汾陽善昭
石霜楚圓
黃龍慧南
楊岐方會
白雲守端
五祖法演
圓悟克勤
大慧宗杲
虎丘紹隆
溈山靈祐
仰山慧寂
北宗
南宗
石頭宗
雲門宗
法眼宗
曹洞宗
洪州宗
臨濟宗
黃龍派
楊岐派
大慧派
虎丘派
溈仰宗

じ各流派が交代に盛衰を繰返している。まず唐代には北宗禅が栄え、ついで南宗禅に移り、中でも洪州宗（江西宗ともいい、のち潙仰宗に発展する）が興り、石頭宗が之につぎ、五代に入って法眼宗、北宋になって雲門宗及び臨済宗黄龍派、南宋に入って臨済宗楊岐派が興っている。唐代には、禅寺の独立が完全でなく、たとえ独立しても、未だ官憲の保護を受けるには至っていないが、北宋に至って、汴京（東京）に大相國寺を開き、六律二禅と称して、律僧と禅僧とを六対二の割合で住せしめたのが、禅宗に対する官僚統制のはじめである。これは主として雲門宗全盛時代の制度であるが、南宋になってからは雲門宗は衰微してしまうので、一旦、この制度は立消えとなってしまうが、しかし禅宗は一層深く中国の貴族である士大夫階級に受入れられ、臨済宗楊岐派のうちでも大慧宗杲を主とする大慧派が貴族社会にむかえられ、主としてこの派を中心とした官僚統制が、再びはじめられることとなった。一説によると、大慧宗杲の頃、杭州の霊隠寺の僧等が同寺内の直指堂に集って相議した結果、禅寺に寺格を定め、第一徑山、第二霊隠などというように順位をつけたという。しかしこれは飽く迄も私的の制定であって、官制ではなかった。その後幾変遷があったが、間もなく、官府が住持を任命する官寺の寺格の最上位のものとして主要なる禅院五箇が制定されるに到った。即ち左の通りである。

順位	寺名	略称	開山	所在地

第一	徑山興聖萬壽禪寺	徑山	道欽（國一禪師）	杭州臨安府
第二	北山景德靈隱禪寺	靈隱	慧　理	杭州臨安府
第三	太白山天童景德禪寺	天童	義　興	明州慶元府
第四	南山淨慈報恩光孝禪寺	淨慈	永明延壽	杭州臨安府
第五	阿育王山廣利禪寺	育王	宣密素	明州慶元府

その後、いつの頃か、その次位に十箇の禪寺を列して、之を十刹というようになった。それは次の通りである。

順位	寺名	略称	開山	所在地
第一	中天竺山天寧永祚禪寺	中竺	千歲寶掌	杭州臨安府
第二	道場山護聖萬壽禪寺	道場	如訥	湖州烏程県
第三	蔣山太平興國禪寺	蔣山	寶誌	建康上元府
第四	萬壽山報恩光孝禪寺	萬壽		蘇州平江府
第五	雪竇山資聖禪寺	雪竇	常通	明州慶元府
第六	江心山龍翔禪寺	江心	真歇清了	温州永嘉県
第七	雪峰山崇聖禪寺	雪峯	義存	福州侯官県
第八	雲黃山寶林禪寺	雙林	傅翕	婺州金華県
第九	虎丘山雲岩禪寺	虎丘	契嵩	蘇州平江府
第十	天台山景德國清教忠禪寺	國清	智顗	台州天台県

更に、その次に甲刹（かつさつ）という寺格も設けられた。甲刹とは、禅院に甲（首位）たるものという意であるとも、各州に甲たる禅刹の意であるともいう。その主なものは次の通りである。

寺名	略称	開山	所在地
顯報禪寺	華蔵	安民（中興）	常州無錫県
大龍翔集慶禪寺（龍河）後覺原住して五山之上に位せられ天界寺と改む	天界	笑隱大訢	建康府
仰山太平興國禪寺	仰山	慧寂	袁州宜春県
廬山東林禪寺	東林	常總	江州南康軍
能仁寺（雙峨）	承天	傳宗禪師	蘇州長州県
教忠報國禪寺	大慈	笑翁妙堪	明州寧波府
金山龍遊禪寺	金山	裴頭陀	潤州鎮江府
焦山普濟禪寺	焦山		潤州鎮江府
何山移忠禪寺	何山	佛燈守珣（中興）	湖州安吉府
鳳臺山保寧禪寺	保寧	牛頭法融	建康府
報恩光孝禪寺（嘉禾天寧）	天寧		秀州嘉興府
永福禪寺	永福		饒州
百丈山大智壽聖禪寺	百丈	懷海	洪州隆興府
廣惠禪寺	清凉	法眼文益	建康府
雁山能仁普濟禪寺	雁蕩	竹庵士珪	温州鎮江府
廬山圓通崇勝禪寺	圓通	道濟	江州山北路

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.